

走馬燈

七

尾崎紅葉天竺去前後記事

特別
14
1919
161



--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

Blank page with a faint handwritten mark near the bottom right corner.

時

天保二十六年十月廿日

のまはれはるるのりよとら老枝とんもあを山心
 矢来つりももあを扱とて枝の併と接し手代
 をえとをふふ急危島の路とてまを引直し横寺
 町の山人の書を改ひて、筆のうらふ流る一とまを角
 田屋敷名三田武内堀市井(横河)とて改て在て大
 鉢を圓とていひて流し合ひてあまを改作ぬ
 何とてあまの改作ぬとて改作ぬとて改作ぬとて改作ぬ
 二三のなるる改作ぬとて改作ぬとて改作ぬとて改作ぬ
 ぬはらたを改作ぬとて改作ぬとて改作ぬとて改作ぬ

此はわづらひのこゝろをさしおひしむるに必りな
死ぬき秋夜に乾ぬるの 心よりのむと口すまひに
ぬを御るをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
ふを御るをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
うどの位をまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
いくつともをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
周知知るをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
能中一をまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
うを左の女をまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
おれを二体かゝれをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
うをかゝれをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
能く御るをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを

ふかきんをうをまゐるを
ふかきんの御りをしてまゐるをまゐるをまゐるを
つゆをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
うをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
周知知るをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
能く御るをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
ふかきんの御りをしてまゐるをまゐるをまゐるを
つゆをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
うをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
周知知るをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
能く御るをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
ふかきんの御りをしてまゐるをまゐるをまゐるを
つゆをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
うをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
周知知るをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを
能く御るをまゐるをまゐるをまゐるをまゐるを

キヤウガ全書と其の書翰と宛らんことを執事
ひ床とて因縁を執族日一禮を賜うし
くく退出せしむ余を二月既山人と見え
こころを其の書翰の宛らんをさしきり一函を
書したるは書翰の宛らんを早に備する具
つらむを伺つたま口を言ふは誰れか之を
を一函の命あつたもせん此書翰の宛らんを
しとて致ししるるるを更相款の法を執事
得たるる

山人を其の書翰と宛らんをさしきり一函を
書したるは書翰の宛らんを早に備する具
つらむを伺つたま口を言ふは誰れか之を
を一函の命あつたもせん此書翰の宛らんを
しとて致ししるるるを更相款の法を執事
得たるる

小原風を心にも友人の情をうらむ、病状より
甚い一つ、あつて、いふ病状より友人
一日を其の書翰と宛らんをさしきり一函を
故の書翰と宛らんをさしきり一函を
坐の席とて一照らしえし、いふ病状より
い秋の掬が、どうぞまがいに、いふ病状より
毒命を保つ、いふ病状より、いふ病状より
いふ病状より、いふ病状より、いふ病状より
いふ病状より、いふ病状より、いふ病状より

尾崎紅葉氏逝く

現代寫實派小説の巨擘として名高一世に馳せたりし紅葉山人尾崎徳太郎氏は今春以來胃癆を患ひて病褥に在り或ひは煙霞の間に放養し或は名醫の診療を受けて攝生怠りなかりしが不治の病症とて藥石効なく終に一昨三十日の夜十一時十五分僅に三十七歳の壯齡を以て牛込區横寺町四十七番地の自邸に逝けり文壇落莫世と俱に秋なるの際紅葉の名に負かずして無常の風に散り行きしは惜みても尙餘りあり今山人の生涯を左に略記す

山人は慶應三年十二月十六日東京芝區片門前に生れ東京府中學校を卒業の後明治十五年三田英學校に入り且つ當時の碩儒石川鴻齋翁の門に學び十八年大學豫備門より二十一年進んで東京帝國大學法科に入り一年修業の後轉じて文科に入り學ぶと二年にして去る、是より先二十年頃同志の青年文學者を集めて硯友社を組織し雅樂多文庫を發行して大に文界の眠りを攪醒せり二十二年新著百種の初刊として小説色懺悔を出だし紅葉の名忽ち揚る而して二十三年大學を去りて日就社に入り筆を讀賣新聞に執り傍雜誌江戸紫を發行し二十九年春

陽文庫の主任となり又文藝を監督し縦横に文壇を



馳せ廻り幸田露伴氏と並びて文界の二驍將と稱せらる、其後日就社を辭し専ら小説作家として多く名篇を出し昨年七月二六新報の聘に應じて堀紫山氏と共に同社に入りしが性來健康を誇りし身も數年前より胃に痼疾ありて本年二月に至り意外にも痼ならずと認められ三月三日大學醫院に入りて診察を受けし所果して胃痼なりしより同十二日退隱して爾來銚子方面に轉地し又歸京して靜養を勉め

元氣少しも衰へずして談笑平生の如くなりしが去二十九日より病狀革たまりて終に自ら不起を悟り友人及び門下生一同を枕頭に集め平素の親交を酬し門生には今後益一致して文學に盡すべき旨を諭し且つ遺言して曰く葬式は勿論質素にせよ、興は嫌ひなれば駕籠にして四隅へ白蓮の造花を挿すべし又配物も予は焼饅頭を好まざれば京橋銀座演町の菊の家へ命じ米饅頭に紅葉の印を捺したるを用ふべし、但し漬し餡にして折などは毫も氣取るべからず又予は七生まで生替はりて文筆を捨てざるべし云々、死期に臨んで追らざる悠揚の姿賭るが如し、時に座に在りし竹冷宗匠は徐に一句を求めしに山人莞爾として

死なば秋露のひぬ間をかもしろと云ふ近作一句を示し此位の所で御免を蒙りませうと云ひ臨終まで言語明晰にして時々昏睡に陥りながらも精神更に亂れざりしが一昨日夕刻より病勢昂進して終に十一時十五分永眠せし次第なり、妻女さく子との間に男一人女三人の子あり皆幼家庭最も圓滿なりしだけ今此計に接して悲感更に深し、葬儀は明二日午前八時出棺、青山墓地へ送

る事に決し遺言により遺骸は今日大學にて解剖に附する由、氏の著書は明治文壇の花として名篇佳作頗る多く一々擧ぐるに遑なれども金色夜叉を始めとして多情多恨、三人妻二人女、伽羅枕、心の闇、隣の女、不言不語又滑稽物として「夏小袖」「八重櫻」等皆洛陽の紙價を貴からしめたるものなり、氏亦俳諧に志し角田竹冷氏等と共に秋聲會を起し且つ書は蜀山より出で、一家を成し清楚古雅の態あり、小説の絶筆は今春二六紙上に載せたる「草分衣」にして病氣の爲半途筆を投ずるの已むを得ざるに至れり又近頃友人門生等相謀りて紅葉全集編纂の計畫あり其出版を見るに迫ばずして逝かれしは遺憾なるが門下は秀才頗る多く鏡花風葉春葉等青年作家の鋭を萃めたるは師たる山人亦以て瞑すべきなり

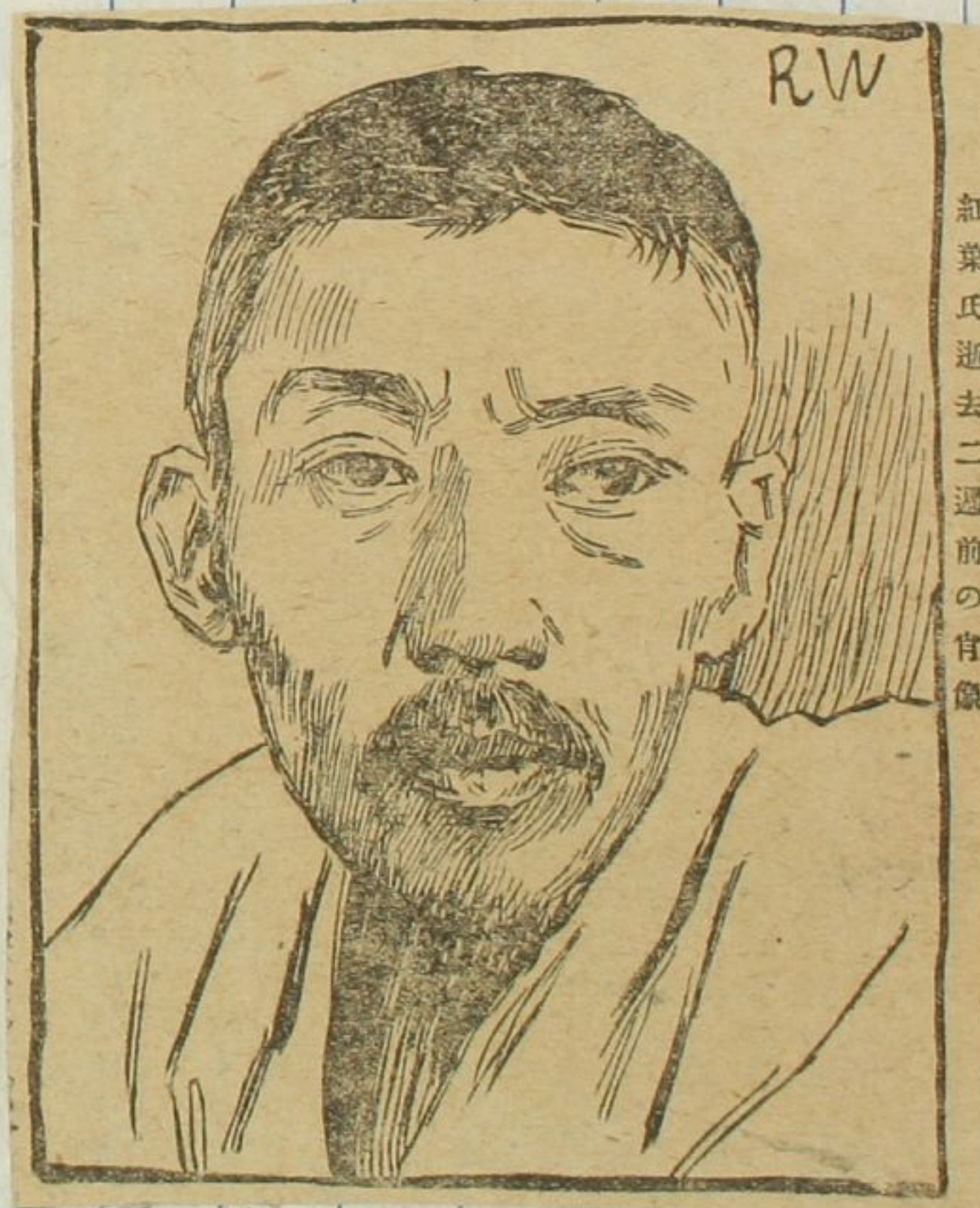
以て紅葉氏の遺稿を
のてしるるは又其指しるる也
枯のたししるる也

◎文壇の明星隕つ

尾崎紅葉氏の訃

傑たる光芒牛込横寺町の空に流れて小説界の魁星尾崎紅葉氏逝く多年文壇の秋に千段の錦繡を織り作したる其辭其文も今は徒らに忍ぶ草露宿す種こそなれる青菊一束其人玉の如し、今その臨終の状を語り小説家としての氏が洒脱なる生涯の終焉記となさん

▲死去前後の模様 氏が病症は曾て記せし如く不治と定められし胃腐なるが主台醫たる栗本博士、全生醫院長木澤氏、令閨の令兄樺島信太郎、同直次郎氏等がさまゝに盡せし醫藥の甲斐にて一時は病勢を防ぎ留められたれど二十八日頃より俄かに容体悪しく臨終の迫れるかど見えしに家



紅葉氏逝去二週前の肖像

夜中とて詮方なく幸ひ有合せし懐中汗粉を薦めなとして二十九日となりこの日も見舞ひの客は一々病床に延きていつに變らぬ体なりしが午後三時より再びけしき變り夜に入りては氏自らも死期の近づきしを覺りけん家族門生に向ひて遺言などありつひに翌三十日午後十一時十五分として病苦も見

紅葉氏令閨と三女三千代



えず眠か如く死す行年四十有七さて葬儀は

明二日青山共同墓地に執行はる、管なり ▲遺骸を解剖に附す 三十日の午前四時三十分頃氏は家族友人門生を枕邊に集へ一人々々に遺言ありしその趣は人に依りて異なりしが石橋思案氏に向ひては死後の我遺骸は解剖に附して我が爲に醫藥の數を盡し給はりし主治醫の方々の參考に供するやう計らはれたき由を言出しに思案氏も流石に座に列なる令閨親戚等の心を兼ねて諾否を決し兼て見えたるに氏は重ねて此儀は疾より心に定め居りし事なれば生返解では困る必ずしも我意通りにせられたしと決意動かすべからざるに遺言通り遺骸は本日親戚知己立會の上栗本博士執刀にて解剖する筈 ▲月下の俳筵 これも今は涙の種なるが去る十五夜門生を集めて観月の俳筵を病室に開き運座などして清興を樂しみし折ふし座上の門生に「十三夜はいつだらう」と突如として問出けるに來月三日なる由を答へし所氏は更に「片月見はしないものだ昔

から云ふから、十三夜にも多勢寄て月見を
したいものだがそれまで命があらうかしら
然し俺が居なくなつても屹度この間へ月見
に集まつてくれ、その時は俺も穴の中から
一句やうらよ」と諧謔を交へつゝ快げに空
を見上げて月光を浴びたる師の淋しき音容
はまだ目に残れるにその十三夜に先立つ僅
かに五日にしてつひに不歸の人となり當夜
の俳遊に上りし月影は墨痕もまだ乾かぬ墓
標を照すかと思へば坐るに無常の迅速なる
を覺ゆと鏡花氏は語りぬ同夜の俳遊に列な
りし門生の人々は幾年の秋も光變らぬ十五
夜十三夜の月に對する毎に追懷の情禁じ能
はざらん

▲臨終前の師弟の別杯 門下の士は氏が
病革まりてより交代して師の病を護りこの
數日前は夜も眠らずして病床の夜に伽し居
たるが小栗風葉氏は長夜の看病勞れを忘る
ゝ爲毎夜師家に酒を携へ行くを例とし居り
しに三十日午前四時頃氏は小栗氏と泉氏
を呼びて「小栗は酒を持つて来たかな」とい
ふに持來りし由を答へし所氏は「今夜は淋

しいから景氣を附けやう、こゝへ持つて來
て飲んだら好いだらう」といふも恰も同夜
は玄關に詰め居たる門生一同して飲み盡し
一滴も餘さざるにそ其旨答へしに氏は「さ
うか開なら俺も飲むから家に取たのを持て
來るが好い」と家人に吩咐け燭を付けさせ
て徳田秋聲氏の齋せし鶏と松茸を着に門生
一同を車屋にしまつ氏より大杯を取りしも
手顫えて意の如くならざる爲下に置きて硝
子の管にて其口に注ぎ入れ其流れを一同に
廻し飲みしがこれぞ永き師弟の別れなりき

▲配り物の意匠を桂舟氏に托す 氏が細
心にして洒落なるは今際に迫りても平日に
異ならず死去當日の午前十島氏の來訪した
る時も同氏に向ひ「かう早く死なうとは思
は無かつたので家の中も整理して置かなか
つたが死後會葬者に家内の亂雑を見せるの
は心持が悪い」と云ひ又家人には「棺は瘞
棺は何も蟲が好かぬ、俺は駕にして白い運
を立て、くれ」と遺言し特にその配り物は
退院せし當時より意匠を凝し居たるが當日
遺言の中に加へて「配り物の饅頭は只ので

は面白くないから三十間堀さく屋の米饅頭
にして餡は潰し餡がいゝ折は餘り氣取ても
不可が何か好思ひ付がありさうな者だ」と
いひつゝ暫く經て桂舟氏が來りしに「イヤ
君に折の意匠を頼まう好いやうに考案して
くれ給へ」といひ残せしにぞ目下同書伯が
考へ中なりといへり又彼の米饅頭は焼き形
はおつて無のから愛印を寫せる金印を捺す
やうにと遺言のありたれば万事遺言通りに
實行する筈なりと

▲辭世の句共 氏は小説京人形に初めて
紅葉山人と署名せしより以來今日までその
雅號を改めず小説にては二六所載の草分衣
を以て絶筆とすべし然るに病氣の頃より山
人を散人と改め記せしが今にして思へば散
とは今日の識をなせしものかといふ者あり
辭世の句としては特にその意にて作りしも
のならねども一昨日の朝角田竹冷氏に向ひ
て「辭世の句を作らうと思ふが佳いのも出
來ないから最も近く作つた句で御免を蒙ら
う」と語りし由なるが最近の作とは一ヶ月
前作れる「死なば秋露の干ぬ間を面白き」

の句なりと其他十五夜の夜の作「モルヒチ
の量ませ月の今宵なり」又「秋の蠅寢顔踏
まへて遊ぶなり」床すれや長夜のうつゝ、砥
に似たり「食鉢の紫、苦き葡萄かな」等は
句々悲韻を帯びざるなし又氏が全集は不日
出版さるべく短文を集めたる「草紅葉」と題
せる書は既に製本成り富山房より發賣さる
べく同店より猶十千百句の句集出づべし

▲同氏の家族と嗜好 同氏家族は令閨さ
く子(三子)の仲に長女ふじ江(二女)やよひ(二
三女)三千代(長男)夏彦(三)の一男三女あり又
嗜好の書籍食品はこれといふものなく最も
多趣味にて毎に書卷を放たず煙草は高價な
るものを幾種類となく喫用し居りしが一昨
夜より痰がからみし爲め日本煙草の常盤が
和かさを以て死する迄喫煙し居りたりと

左の桑山氏の十一
月三二日は石巻也

故紅葉山人の事

一飯不忘君 住昔の文者もものは我
紅葉山人が文章に忠實なるは彼の七たび生
れ變りてと言遺されしによりても知らるべ
き事なるが語ればあはれ今は昨山人が其興
到り想動きて彼の艶麗天下敵無きの文を行
るや天才の人にも有勝なる一氣呵成筆々飛
が如きの概こそ無けれ雅性なる氏は幾度か
訂正し幾度か抹殺し終に美はしき手蹟の原
稿紙は悉く黒塗し了さるゝを常なりとす而
も其版に上るの時は絶えて斧鑿の痕無く百
花爛熳春風に亂れて萬目を奪ひ天下を魅せ
し事は皆人の知る所なれども大作金色夜叉
多情多恨の如き我草分衣の如き新聞小説の
稿稿も後一回の出来上りに非ざれば送附
する事あらざりき
習字して悶を遣る 氣の密ツて書けない
時は習字して悶を遣ると常日頃云はれしが
恰も故人長三洲が作詩中筆の蹟事あれば
其紙に己が好める古詩を書いて書いて書抜
きて漆の様にせざれば己めざりし心意氣に
似通ひたり

葬儀 豫記の如く本日午前八時自宅出
棺にて道順は通寺町に出で右に神樂坂を下
り右に漆園外に添ひ市ヶ谷見附より四谷見
附を経て紀ノ國坂を下り離宮外垣に添ひ赤
坂表町通を経て青山御所前を通過し墓地に
入り齋場に著其行列左の如し

前驅 高張一 生華 二 藤岡 同 早學 楓東京竹
高張二 生華 六 支編 田版一 友馬
島金 木 桂 園永 新 高張一 龍燈二 逆花
市港 曜 案井 派 高張一 龍燈二 逆花
島堂 會 社 田 節橋 橋 高張一 龍燈二 逆花

導師 香燈 位牌 (月桂通百人堂)
(小栗忠愛) (泉鏡花) (石橋政雄)

墓標 花環 條燈 白菊
(親友社) (秋聲會) (門生一同) 銘旗
高張一 龍燈二 逆花
高張一 龍燈二 逆花
高張一 龍燈二 逆花

親族 友人 會葬者

書風 最初は長三洲を學び徒然山を讀し
又唐樂の調を慕ひ更に弘法道風に出入して
今の書風となる

金鑄と天獸 食前の紫若き葡萄酒と吟
せし山人は瞑目数時前大徹底の語を下せり
昨晩は金鑄を半分許食つて見たが寧ろ天獸
繙でも食つて了つたら……と
解剖の模様 山人の遺骸は遺言に依りて
昨日醫科大學に於て解剖せり、午前八時十
三分病理解剖室到着、立會人には横島信太郎、
岡田朝太郎、武内桂舟、齋藤松洲氏以下九
名立會醫士には入澤、栗本、佐藤三博士出澤
氏樋口氏相並て執刀は三浦博士佐藤東二學
士山田氏開始は九時十五分終了せしは十時
十分但し逝去後卅四時間なりき腦も多く
血行も整調毫も病候を認ず生理的頗る佳良
胴物は幽門部に發生し左側へ發育したれど
幸に幽門部を犯さざりし爲め幽門を塞ぐに
至らざりしと
戒名 彰文院紅葉日崇居士(前四十万堂紅
改めしなれば)

十月五日 正午 葬儀 終る
ひるもあまを 持つこと
く晴れりみまふらへり
式りめあふを 他へも
初名をも 直とも
紀元山人の 行きて
その成早や 出棺の
建を用意 終る
行列をさし 終る
内高向 終る
来会を 終る
行列を 終る

代表して石橋思案氏弔詞を朗讀し次で門下生(代表者泉鏡花)秋聲會(代表者角田竹冷)木曜會(代表者生田葵山)の弔詞朗讀あり、聞く者皆袖を濡らしける

▲博士の卒倒 弔詞讀終られて再び讀經の間喪主以下の焼香ありやがて友人等交るる際前に到らんとする時室内文學博士は座に堪へず側なる友の肩に倒れ掛られたり人衆きて直ちに傍へなる茶亭に昇入れ故人が近親なる樺島、岸及び木澤の三醫厚く手當し居合はせし看護婦始め多くの文士看護に力を盡せしかば少時して平生には復られしかど同く文壇に立て多くの門生を有たる人の如何計り此日の有様に心を傷められたけん、博士は固より他の諸氏も此後愈々天授の才を自重せられん事こそ望ましかれ

▲葬事 多くの友は前日来餐食を忘れて亡き人の爲に盡し諸事滞りなく取済され昨日は隣地大信寺の客殿を借りて會葬者を容るるなご殘る方なき配意なりき(一記者記)

▲弔詞 硯友社及び門生の弔詞次の如し
深からん秋をだに、名にしおはれ地に感の花なるべきを、何事ぞ、一夜の雨をあたにして、其魂を結びもあへず、殘光雲を打つて、遠く世を隔て去んぬ。昊天無情、此絶代の才人を奪へる、行年三十有七、命を假せる壽に於て幾何ぞや。人の齡ひの限りあれば、歩いて彭祖に等しかるべからざらんも、せめては生ける常ならんには、ありし世のそれに加へて、更に又貢獻する處の窮りなからんを。七生文章を作らんと言へる、道に忠なる比すべきものもなき、此恨いつの世にか盡くべきや。遺言耳にあり、温容前に映す、然も幽明早く境を異にして、こゝに

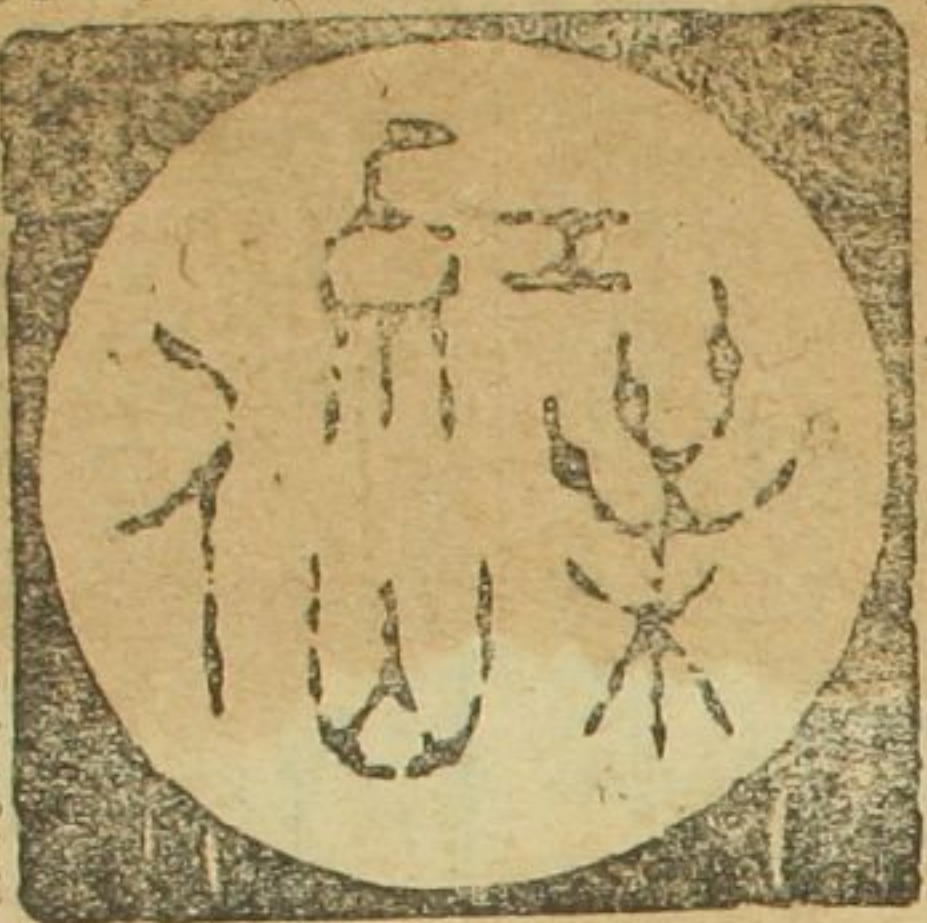
長しへの別れに立てる、我等同人、哀悼の感極りて、殆んど言ふ處を知らず。雲やそれ、水やそれ、石にさへしみ入るばかり、折からの秋の姿よ。哀哉。嗚呼。
明治卅六年十一月二日 硯友社同人

門生十八人、こゝに、涙の袂を列ねて、先生に別れ奉らむとす、誠に、永き御別にもありけるかな、乞ひて留り給はむ御身ならば、御袖に、取絶り、御裾に、取付き申しても、今一度御顔を拜み奉らむものを、御命に代る事の慟ふべくば、誰も誰も勇みて代り奉らむとは願へるものを、昨日は神無月の雨寒く、今日は紅葉の名に見れど、悲しいかな、吾等が先生は逝きて歸り給はざるなり、御恩の一端も酬い奉る事はせせ、御死骸を御墓に送り奉りつゝ、今は何事も申すべき辭なし、唯人の世に三十七年の短き御命は、やがて千載に朽ちぬ御名を呼びて、土の下なる御臥床に安らに眠り給はむ事こそ願へ、あはれ七度も、はた百度千度も文の林に色を添ひる紅葉先生の貴き御魂よ
明治卅六年十一月二日 門下一列

紅葉山人 逆去餘聞 袖時雨

▲解剖と舟舟齋伯 氏の遺骸を解剖に附せしことは前號記載の如くなるが執刀の三浦

博士は局部の解剖を終り頓て腦を解きしに腦量の多きこと一千四百八十グラム(此程解剖せし獨逸某博士の腦量に比して八十グラム多し)あり博士は其全部を掌に載せて仔細に檢視し其整調を説き終りに「大分使用つた頭腦ですな」一言へり當時の在座人等歸りて之を語り諸人に語りしに武内桂舟齋伯突如として「僕も死んでも解剖は御免だ」といふに人々其何故なるを詰れば「幸ひに多ければ結構だが少量かつた時は極りが悪いからな」と此一語



一座の森嶺を破りて舉座動搖めけるに岡田博士(虚心氏)傍に在りて曰く「桂舟はモウ三分の一ぐらゐ使ひ耗してゐるから極りの悪い事はないよ」

▲先生の垢 氏の弟子泉斜汀氏は氏の健康なりし頃より其湯沐に侍して背の垢を流すを例とせり氏常に斜汀を誡めて曰く「お前は己の背中を擦つて垢が出るやうにならなければ文章は上手になれないよ」と蓋し幾月日を經て流垢が上手になる頃ならではとの意を寓せるなり、解剖の時斜汀は柩を護つて大學に赴き手術終はるまで涙堰あへず傍らに立ちあひけるが縫綴畢りて其手足を洗ふに方り斜汀は深き感に打たれけん嘔り上げつゝ海綿を把りて丁寧に氏の四肢を拂拭するにを齋藤松洲氏傍らより「モウ好からう」と注意せしに斜汀は顧みて彼流垢の事を語り「此がお垢の流し了ひと思へば感慨に堪へません」と跡は又涙なるに一座袖を濕さぬはなかりき



▲會葬の間 貫一 氏の傑作金色夜叉は屢次劇に仕組まれて諸所の劇場に演せられしが會葬の途中中川上晋二郎は不圖心付きて傍人に向ひ「今日は間貫一(金色夜叉中の人)が三人お供に立つて居ります」といふに何故かと問へば「私の外に中野(宮戸座)と藤澤(東京座)の三人です」と此日會葬せし新派俳優が此三人限なりしも何等かの因縁ある如くに思はれて此も亡き人を憶ふの種となりぬ

▲遺印 本日の紙上に模寫せし三個の印は氏が發病後愛用せし雅印にして一は「紅葉山人」一は「化我」一は「壽才不盡」の三類なり此内壽才不盡の印は前號に記せし氏が遺言の配り物の焼印に使ふものなり



今夕の月
何處に
照らすか
を
思ふ

思ふ
今夕の月
何處に
照らすか
を
思ふ

三言

唯然

市島大見

と能く承い、いふうても言方を用的に、是は講義を
 出来ぬとて、いふは、自體のあらざるを、用ひしと
 せんは、講義の法を改むるの外なしと、此を、
 おろそかに、大分勉て、こきなる、おろそかに、此の
 も、之をもて、ひし、此の講義を、さすも、ふん、
 む也、今年、初めの、免を、持つても、言方を、用ひ、
 の、講義の、物をも、さすも、ふん、言方を、用ひ、
 也、らんを、さすも、減え、せし、初め、其の、おろ
 を、減り、し、凡そ、さすも、其の、らんを、此の
 言を、さすも、強き、其の、言を、用ひ、
 何と、免も、あら、其の、免を、用ひ、
 一、ま、い、く、自、言を、新、く、言を、得、す、

は此のレブロースをヒレ肉
 だと云つて一年の餘も毎日
 牛肉屋から買付けられたお
 方がありますヒレレブプロ
 ースとは直段が半分も違ひ
 ます、此の三つのレブは皮
 の方に在つて悪い處ですけ
 れども丁度レブロースの眞
 中の心の様になつて圓い長
 い肉が少し計りあります、
 それをスタンデンドブーフ
 と云つて、牛肉中の一番美
 味い所です、ヒレ肉よりも
 美味いのです、少し肉は硬い方ですが料理
 方で大層美味しくなるもので西洋人が大層
 好みます、三つのレブの次即ち背の肉がサ
 ラエンロースの三番同じく二番同じく一番
 と三つ並で居ます、是れが先づ上肉でロー
 スに適當の處です、其中でも一番の處が美
 味いので西洋では一番の處が二番よりも高
 いのですけれども我邦では爾んな區別もあ
 りません、此の三つは背の皮の下に在りま

す此の肉の下にヒレ肉と云ふ上等の處が
 あります、即ち俗に云ふ内ロースで一頭の
 牛で八斤か九斤位より多くはありませんが、
 一頭の牛から十五斤も二十斤もヒレ肉を出
 す様な牛屋がありましたらばそれは必らず
 外の肉を交せるので今の様にレブロースが
 化ける事もありませう、本物のヒレ肉は
 寡いものでロースにしてもビフテキにして
 も或はビフテキブデンにしてもカツレツに
 しても第一等の味を持つて居ます、その代
 り表込みものには適當しません、シチュー
 なんぞには不適當です、ヒレ肉の下の處が
 ケンチ生脂に包まれて居てその脂の中に腎
 臓があるのです、今度は腰の方でランの一
 ランの二ランの三としてあります、此のラ
 ンは柔くつてビフテキに適當の處です、殊
 にランの一二が好いので三は肉が悪くなり
 ます、ランの次がイチボの三角肉で肉は硬
 い代りに大層味があつてポイルドビーフに
 すると極く結構です、ポイルドビーフの外
 にはコーンビーフにも使ひます、それから

ことば

腿となつて上のランド上のペインはビフテ
 キなんぞに使ひますし下のランド下のペイ
 ンは挽肉と云つて肉挽器械で挽いてフーカ
 デンとかコロツケとか云ふものに致します
 肉挽器械で生肉を挽いて料理する時は肉が
 細かくなりますからヒレ肉やロースの上等
 を使はないでも此の邊の悪い肉が丁度適當
 して居るのです、其下が脛の肉でスリーブに
 適當です、其先が足でポイルドに致します
 すと一々委しく圖面の説明

